

京大同学会の闘い

京都大学生運動の歴史

～戦前、戦中、戦後革命期を中心に



反戦ストライキへの弾圧許すな！

4学友への「無期停学」処分撤回を！

京都大学全学自治会同学会中央執行委員会

住所：〒606-8393 京都市左京区東竹屋町50 熊野寮(高田暁典宛)

メール：dougakukai.kyoto@gmail.com

FAX：075-320-2538

京大学生運動と同学会運動は、戦前～戦後を通じて日本学生運動の中心に位置し、日本階級闘争を牽引する役割を担ってきた。戦後革命期から60年安保闘争にいたる闘いは、輝かしい光彩を放ちながら「階級の記憶」となっている。同学会は2012年6月の再建から昨年の反戦バリストを経て、再びみたび学生運動と階級闘争の主人公に踊り出ようとしている。その歴史を素描してみたい。

【1】戦前編

①成り立ち

旧制第三高校を前身とする京都帝国大学は、東京帝大に続く「第二の帝国大学」として1897年に発足した。「帝国大学令」第一条には「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ…」との目的があり、京大は明治政府のアジア侵略＝対外膨張に資する「学問」を出発点としていた。戦中には国粹主義イデオロギーの「京都学派」が跋扈し、人体実験を繰り返した「石井731部隊」には、京大医学部が深く関わっていた。

他方、東大に対抗して「自重自敬・自主独立」の校是を強調し、「自由の学風」を押し出した。戦前には京都学連事件、滝川事件、河上事件など幾多の激突が起きるが、その始まりが「沢柳事件」だ。 ※上写真は1927年の京大正門



②沢柳事件(1913～14年)

当時の大学総長は文部大臣の任命制であり、教授人事権は政府の強力な統制下にあった。「国体上不都合」とされた学説は弾圧され、学者・研究者への休職や辞職強要が相次いでいた。こうした帝国大学下で、1913～14年に教授・学生が一体で初めて起きた運動が沢柳事件だ。当時の沢柳総長(右写真)が7教授に辞職勧告をしたことに、学内がいっせいに反発。教授・助教授ら40人以上が辞表を提出し、14年1月14日開催の学生大会では「学生の総退学」決議に発展した。学生大会は以後も開催され、動員学生数は3000人に達した。文部省は要求を受け入れ、帝大内規に「教授会の同意抜きに教授進退は決定できない」旨が書き入れられ、帝大下で初めて「教授会自治権」を認めさせた。またこの時期、1913年9月に吉田寮が建設される。



③京大社研の結成(1923年)

1917年ロシア革命は、学生の心を激しく揺さぶった。18年9月、京大経済学部の川上肇教授(後の学部長、右写真)を指導者に、日本初の労働者・学生の学習組織である京大労学会が結成される。労学会は京都の労働運動と結びつき、治安警察法撤廃運動や普通選挙権獲得運動などを展開し、「さながら、京都の社会運動の参謀本部の観があった」(『京都大学70年史』)。

労学会は21年に解散させられるが、23年には京大社会科学研究会(社研)に発展した。これは、22年7月の日本共産党創立の強い影響を受けている。この時期、全国学生運動は一大高揚期を迎えた。22年11月7日(ロシア革命記念日)に、全国の学生団体を結集して「学生連合会」(学連)が結成される。これは24年9月に「学生社会科学連合会」に発展、京大社研はこの中心



組織であり140人の大サークルだった。25年7月の学連第2回全国大会は京大で開催され、学連所属団体は70余りに達し、会員は2000人を超えていた。学連は全国で学生軍事教育反対運動や社研解散抗議運動に取り組んだ。

④京都学連事件(1925～26年)

治安維持法の「国内適用第一号」が、1925年12月1日からの「京都学連事件」だ。この時、京大社研メンバー18人と同志社大生15人の計33人が逮捕される。これに京大生は憤激する。3日、京大と同大の社研は『全学生諸君に伝ふ!!』という声明を発した。同日夜の吉田寮の舎生大会では抗議決議があがった。14日、法経一番教室(現百周年記念ホール)に超満員の1000人が集まり、沢柳事件以来11年ぶりの学生大会が開催された。大会では警察への抗議と並んで、京大史上初めて学生自治会結成が決議された(大学当局が認めずに頓挫)。33人は7日までに釈放されるが、翌年1月15日の再びの全国的社研弾圧で38人が逮捕・起訴される(うち京大生20人)。発展してきた京大学生運動と共産党組織は大打撃を受ける。 ※右は事件を大々的に報じる当時の新聞

さらに「1928年3・15大弾圧」で全国で約1500人が逮捕され、京大学生運動は壊滅状態となる。うち483人が起訴されたが、29人は社研会員を中心とする京大生だった(その後7人が放學処分)。国家権力は京大学生運動が革命運動と結合することに恐怖し、執拗に攻撃して、事件後の4月に社研を強制解散させた。同時期に学連も解散させられた。



⑤河上事件(1928年)

1928年4月、河上肇は「左傾教授」として免官させられる(沢柳事件後の京大では初の学者追放)が、4月20日に京大生は学生大会を開催して抗議している。「29年4・16大弾圧」(全国で4942人が逮捕)でも、多数の京大生が逮捕された。しかし、京大生は不屈の反戦・反権力闘争を継続した。

【2】 戦中編

①滝川事件(1933年)

戦前に治安維持法違反容疑での検挙が最も多かったのは1932年だ(13938人)。京都でも31～32年に大検挙があり(計850人超、うち京大生161人)、共産党を軸とする社会運動・学生運動は指導部を大量に奪われて混迷していた。そこに「滝川事件」が起こった。

時あたかも、世界大恐慌(1929年10月～)で爆発的に失業者が生み出されていた。日本は柳条湖事件(31年9月18日)以来、中国・アジア侵略戦争にのめり込んだ。32年には海軍青年将校が「5・15事件」を引き起こし、33年1月にナチス・ヒトラーがドイツで政権を握った。同1月に河上肇が検挙され、2月に小林多喜二が獄中で特高警察に虐殺された。世界中で「30年代革命情勢」が沸騰していた。

1933年、法学部教授・滝川幸辰(ゆきとき、次頁写真)の自由主義的刑法学説が「左翼思想」とされ、文部省勧告で休職処分とされた(5月25日)。ここから戦前期最大規模の大学人の抵抗運動が巻き起こる。法学部の教授、助教授、講師、助手全員が辞表を提出して抗議。学生は連続的に学生大会を成功させ

(5月18日に法学部＝800人が参加、26日に経済、27日に医、31日に理、6月2日に文、3日に農)、6月6日には時計台大ホールで京大史上初の全学学生大会が開催され、3000人の京大生(学籍者の約6割)が集まった。この闘いは全国に波及し、6月21日には東大で3000人の学生大会が行われた。ここが高揚のピークで、6月20日に京大で運動の中心メンバー15人が逮捕される。7月末には京大当局は各学部の高代会議(高校同窓会別の学内組織)本部に解散命令を出し、学生の教室使用を禁止。8月には『京大新聞』での滝川事件報道は禁止された。事件の影響も受けて、34年に文部省学生部は「思想局」に改組された。弾圧で闘いは敗北した。

滝川事件を契機に、日本学生運動は33年に戦前期最大の高揚を迎えた。日本の労働争議数のピークは37年(628件、参加人員12万3730人)であり、小作争議のピークは34年(5828件、参加人員12万1031人)だ。「戦前＝暗黒期」だったのではない。労働者人民の怒りは満ちあふれていた。戦争に突き進む帝国主義政府を打倒する現実性と可能性はあった。日本共産党の誤った指導をのりこえる革命的な労働者党が求められていた。



②同学会の誕生と学徒動員

1939年、大学での軍事教練が必修となった。同年、「国民徴用令」制定で大学が戦時動員対象となった。43年10月から東条内閣は20歳以上の文科系学生を徴兵し、出征させた。41年から文部省訓令で、全国大学に侵略戦争翼賛機構としての「学生報国団」が結成され始めるが、京大では既存の「校友会」がこの時に「同学会」と改名した。

43年10月21日の東京・明治神宮外苑での出陣学徒壮行会に続き、11月20日に京大農学部グラウンドで出陣学徒壮行会が行われた(写真右上)。出陣学徒数は2000人をこえたが、戦死者総数は不明のままだ。学生は戦場に駆り出され侵略の銃を握らされた。この歴史を絶対に繰り返してはならない。



壮行式後に分列行進で正門を出る出陣学徒

【3】戦後革命期

①戦後革命期の同学会再建(1946年)

日本の敗戦を経て「新制大学」が発足した。京大では45年11月以降、社研や「京都学生連盟」などが相次いで発足した。京大学生運動は、軍国主義教授追放と戦前に追放された教授の復職運動を全国で最も激しく闘った。「京都学派」教授を退陣させ、滝川事件で追放された教授を復職させる運動だ(右記事参照)。

46年3月、「同学会学生協議会」が発足した。これに各学部の学生自治準備会が合流し、46年12月10日に戦後初の全学学生大



会が開催され、全国の国立大学で最初の全員加盟制自治会が発足した。戦後革命期のど真ん中で誕生した同学会は、労働者人民の生きるための決起に呼応してただちに闘い始める。47年2・1ゼネスト前日の1月31日、同学会は法経一番教室で「生活危機突破全京都学生大会」を開催した。

48年6月26日には全国114校－20万人が参加する学生ゼネストが闘われ、その高揚の中で9月に全学連が結成された(全国145校－30万人が加盟)。同学会からは結成大会に2人の代表が参加した。

②反イールズ闘争(1950年)

49年4月に「京大看護学校事件」が起きる。京大医学部付属医院厚生女子部(現京大医療技術短期大学部)の学生6人が、自治会活動を理由に京大病院への採用内定を取り消されたことに抗議しハンガーストライキに決起した。5月19日に3000人で緊急全学学生大会が開催される。この闘争をめぐり同学会執行部は分裂した。各学部自治会が同学会不信任を決議する中、6月20日に同学会執行部は解散を宣言、9月に全学連を脱退した。しかし、闘いと団結を求める京大生の声に押され、12月には全学部自治会の参加で同学会は再建され、50年4月に全学連に復帰した。

中国革命勝利と朝鮮戦争前夜、49年から「レッド・ページ」攻撃が始まっていた。GHQ教育顧問のイールズが新潟大を皮切りに全国大学で「大学から共産主義者を追放せよ」の反共演説を行っていた。これに対し50年5月2日、東北大でイールズ講演会を中止に追い込む大勝利を勝ちとる。

京大では50年5月の同学会の全学投票で、投票した学生・教職員5417人の75%がレッド・ページとイールズ反共声明に反対した。6月3日には全学連が呼びかける全国41校－7万5千人のゼネストが行われ、京大でも5学部がストライキに入った。同学会は1000人で全学決起大会を開いた。

全学連の闘いに驚愕した吉田茂内閣は、6月12日に天野文部相が「全学連解散」を各大学に要請する。朝鮮半島では6月25日に朝鮮戦争が勃発した。京大当局は10月16日の『告示9号』で「京大をレッド・ページの対象除外とする」と声明したが、同じ『告示9号』で学生ストライキを禁止した。21日、同学会が「レッド・ページ粉碎－『告示9号』撤回要求」の全学決起大会を1000人超で開催した。



③総合原爆展の開催(1951年)

1950年11月に「京大前進座事件」が起きる。京大演劇部講演への弾圧に対し25日、同学会は無許可集会、学内デモ、時計台内座り込みに決起し、川端署抗議行動で5人が逮捕された。京大当局はただちに同学会委員長を含む36学生に大量処分を下した。同学会は27日に全学抗議大会を強行した。

51年の原爆展開催は原爆被害を初めて社会的に明らかにし、「同学会」の名を世に広く知らしめた。5月、同学会は京大春季文化祭で原爆展を開催し、4000人以上が参加した。7月14～24日には世界初の「総合原爆展」を京都丸物百貨店(近鉄百貨店の前身)で開催し、「朝鮮戦争反対、再軍備反対、全面講和締結、核兵器廃絶」を強く訴えた(右写真)。医学部生の火傷・ケロイドの写真解説、文学部生の峠三吉の詩集抜粋、理



学部生の原爆の原理解説などが創意工夫をもって行われた。丸木位里・俊夫妻の「原爆の図」全5部作(当時)も公開され、約3万人の京都市民が訪れて大成功した。京都原爆展は、54年のビキニ事件に端を発する原水爆禁止運動が全国的に拡大する基盤となった。

④天皇ヒロヒト来学事件(1951年)



51年11月に「京大天皇事件」が起きる。昭和天皇ヒロヒトの京大視察の際、同学会は「天皇の名の下に侵略戦争に駆り出され死んでいった学友の声を代弁する」、「貴方が今又、単独講和と再軍備の日本であつてと同じような戦争イデオロギーの一つの支柱としての役割を果たそうとしている」と公開質問状を発した。視察当日の12日、京大前の東一条通に「我々の先輩は神様であるあなたの手によって戦場へ送られ殺されました。もう絶対に神様になるのはやめてください。『わだつみの声』を叫ばせないでください 京都大学学生一同」という大看板が立てられた(写真上左)。ヒロヒトが「君が代」の放送とともに京大吉田分校(現吉田南キャンパス)正門から時計台前広場に到着した際、2000人の京大生が「平和の歌」を大合唱して「君が代」をかき消した(写真上中)。 ※事件を報じる『京大学園新聞』(写真上右)

この問題が翌日の国会で取り上げられ、15日に京大当局は同学会に解散命令を出し、17日には同学会委員長はじめ8人に「無期停学」処分を出した。いったん解散命令を受けた同学会だが、闘う京大生は52年の破壊活動防止法反対闘争や53年の内灘基地反対闘争などを粘り強く継続し、その高揚の中で同学会再建準備会議が結成された。53年6月、4568人の全学代議員選挙で同学会は再建された。

⑤第二滝川事件と同学会解散(1955年)

1953年に「荒神橋事件」が起きる。時計台前の府学連主催学生大会に警官隊が介入したことへの11月11日の抗議集会後、デモ隊は荒神橋付近で警官隊と激突した(右写真)。警官隊の暴力行使に抗議し、19日には学生3500人に市民を加えた大集会が時計台前で開催された。

55年の「第二滝川事件」で再び同学会は解散に追い込まれる。「創立記念祭」をめぐって、同学会と滝川総長の交渉(6月3日)が決裂した際、総長を取り囲む学生に警官隊が導入された。5日、京大当局は同学会解散を命ずる『告示8号』を出し、7日に2人の京大生が逮捕された(後に起訴)。



【4】同学会再建と60年安保闘争

58年6月9日に同学会再建準備会が代議員選挙告示を行った。準備会議長で経済学部3年だった北小路敏同志(右写真)が、60年安保闘争に至るまでの同学会と全学連運動を最先頭で牽引していく。北小路同志(56年に京大入学)は60年安保闘争で、全学連指導部の大量逮捕を受けて全学連委員長代行となり、樺美智子さんが機動隊に虐殺された6・15国会闘争を指導する。安保闘争後の61年7月の全学連第17回大会で委員長に就任した。京大学生運動が生み出した偉大な革命家であり、資本主義・帝国主義と生涯をかけて闘い、2010年11月13日に逝去された。



代議員選告示に対し、当局は6月11日の『告示7号』で選挙を禁止した。しかし準備会は選挙を強行し3600人が投票。当局は7月1日に『告示8-9号』で、9学生の処分と同学会解散を発表(処分は10日後に撤回)。この年は再建はならなかったが、59年5月22日からの同学会再建規約の全学投票で約4900人が投票。4000票を超える賛成で同学会は4年ぶりに再建された。6月20日に『同学会再建宣言』が発せられた。再建同学会委員長となった北小路同志の指導のもと、同学会は安保全学連の一翼で国会闘争に決起。60年4月26日の全学連ゼネストの際には同学会も3学部でストを実施した。同学会は5月13日の全学学生大会を経て、19日からストに入った。26日には学生に教職員を加えた京大史上初の全学大会が3000人で開かれた。



(左)国会前で対峙する警察とデモ隊、(右)南通用門を破壊し国会構内に突入一最前列でトラメガで訴える北小路同志、いずれも60年6月15日

【5】70年安保・沖縄闘争

1967年10月8日、全学連は佐藤栄作首相(当時)の訪ベトナムを阻止する羽田闘争にたった(写真右)。弁天橋での激突で、京大生・山崎博昭君(文学部1回生)が機動隊に虐殺された(写真左、事件を報じる『京都大学新聞』)。68年10・21国際反戦デーでは同学会執行部を握る共産党系を圧倒し、教養部で京大初のバリケードストを貫徹した。



70年安保・沖縄闘争と大学闘争の高揚の中、京大でも69年1月から闘いが爆発した。引き金は寮闘争だ。65年4月には熊野寮が開寮していた。1月15日からの奥田総長との団交決裂後、全寮闘争委は16日

から学生部を封鎖。寮闘委および教養部闘争委と共産党系同学会行動隊が大激突し、23日に封鎖は解除された。これをきっかけに27日から医学部4回生が無期限ストに突入。教養部代議員大会が31日からの無期限バリストを決議した。各学部も続々と無期限ストや長期ストに決起した。

京大全共闘は「入試粉碎」を掲げて2月26日に本部時計台を封鎖。全学でのバリケード封鎖をめぐる激しい攻防を経て、京大当局は9月21日に機動隊導入を決定した。2000人の機動隊が投入され、時計台砦を焦点に30時間の激突を繰り広げた(写真上右、時計台上で最後まで闘う)。この9月時計台バリケード決戦は京大だけにとどまらず、8月の広島大決戦(8月17～18日に2000人の機動隊を相手に30時間の解放砦戦を闘う)と並んで、同年11月の佐藤首相訪米(と日米首脳会談)阻止闘争の突破口となり、「すべての米軍基地を撤去せよ！」と全島ゼネストに立ち上がる沖縄の労働者人民との連帯を貫くものでもあった。



【6】第2波ストー京大学生運動の爆発へ！

京大学生運動と同学会運動は一つに、戦争攻撃と真っ向から闘ってきた歴史だ。京大生は全国学生の最先頭で集会・デモ、ストライキ・バリストで反撃を叩きつけ、労働者人民を鼓舞激励してきた。

二つに、全人民的な獲得力と求心力を持ってきた。政府が東大・京大を国家政策を貫徹する「人材育成」の環と位置づけるがゆえに、その心臓部からの京大生の反乱は多くの人々に感銘を与え希望となる。

三つに、同学会権力をめぐり熾烈な党派闘争が闘い抜かれてきた。同学会運動が全国学生運動の「主流派」であるがゆえに、同学会の全歴史は、あらゆる政治勢力を巻き込んでのしのぎを削る組織攻防戦だった。それに勝ち抜き、反戦ストを闘う現在の同学会中央執行委員会が存在している。

四つに、いかなる処分・弾圧にも負けない活動家・革命家を膨大に生み出してきた。

五つに、屈指の団結力を誇り、国家権力と京大当局の自治破壊(廃寮化)攻撃をはね返し続ける自治寮の存在こそ、京大学生運動の最大の特徴だ。

六つに、京大学生運動の全歴史を引き継ぎ発展させる決意で、2012年6月に闘う同学会は再建された。それは、「2011年3・11」で噴き出した根底的怒りを学生自治会として物質化させる挑戦であり、不屈に闘い抜いてきた06年3月以来の法大闘争を全国に拡大していく決断だった。

七つに、実際に同学会と京大生は、キャンパス潜入の公安警察を摘発・追放し(14年11月)、昨年10・27反戦バリストに対する6学生令状逮捕攻撃(今年2～3月)を完全に粉碎し、弾圧に勝ち抜いてきた。

総じて、昨年の反戦バリストを突破口に、そして10・3京大集会と今秋第2波ストを跳躍台に、京大同学会は全国学生運動と日本階級闘争の牽引車として飛躍していく。

国際連帯を貫き、安倍政権の改憲・戦争攻撃を粉碎しよう！ 処分を下して戦争攻撃に与し、京大生の自治と団結を破壊する山極壽一総長体制を打倒しよう！ 絶対反対の団結で、「バリケードストライキ」を日本学生運動に荒々しく甦らせよう！ 「ストライキは犯罪」と叫ぶ共産党をぶっ飛ばそう！ あらためて、京大第2波ストー全国大学反戦ストへ全国学友はともに闘おう！ 【発行：2016年9月20日】